

## 世のため人のため — 松尾 国松 —

昭和四年、岐阜市長として二期目を迎えた松尾国松は、市民の健康を考えた。

「飲料水」と「浴場」、「便所」の三つを改良して、衛生的な都市にしようとした。

国松は、まず上水道の建設を手がけた。当時、長良川に近い北部の井戸からは、良い水が出ていた。しかし、南部<sup>でいとそ</sup>は泥土層の深い地質で雨が降り続けると水が茶色ににごり、白い布でこまなくては飲めなかった。それなのに、岐阜市民二万戸のうち一万六千戸は、上水道を作ることに反対した。

「水なんて井戸をほればどれだけでも出てくる。どうしてただのものに高いお金を出さなければならぬのか。」

「私ら北部は、とてもいい水が出ます。それなのに、どうしてわざわざ水道なんか作るのですか。」

「上水道を作っている都市は、全国でもごくわずかです。多大な費用もかかります。また早すぎます。」

こうした反対の声は、あちらこちらからあがった。それにひるむことなく、国松は市民の会合に出席して、上水道の必要性を説いて歩いた。昼間の勤めで疲れた体にむち打って、連日、会合に出ては説得し続けた。やつと、水質が悪くて上水道を必要とする最南部の地から、まず工事を始めることにこぎつけた。

上水道工事の経費は、当時の政府の見積もりでは約三百万円であった。岐阜市の年間予算が百万円ほどであったから、いかに多くの金額が必要であったかを知ることができる。国松は、それを切りつめて、百六十五万円を予算化した。政府の見積もりの約半分でやりとげるために、次の二つのことを考えた。

### 一．仕事の無駄<sup>むだ</sup>を省いて能率を上げること

同じ経費で二倍の仕事ができれば、結果として、経費は半分ですむという計算である。

### 二．岐阜市独自の材料を使用すること

材料を買い入れれば高くつくので、自ら材料を作るという方針をとった。例えば、当時一本五円する土管が、二円三十銭でできた。土管は水道工事に最も多く使う材料で、そのうえ、簡単に製造できたので、すぐ実行した。

この結果、工事は進展し、わずか四ヶ月後には、給水できるようになった。

南部の給水が始まると、北部の世論も変わり、第二期工事に取りかかることができた。しかし、途中で政府の方針が変わり、総経費の三分の一を占めていた国からの補助金が打ち切られることになった。上水道工事は危機に直面した。しかし、南部の人たちの喜ぶ姿に接し、市民のことを考えると、国松はここで引き下がることはできなかつた。国松は寸暇を惜しんで、何度も何度も上京して、上水道設置の必要性を、政府の担当者に熱心に説いて回った。ついに国松の熱意が通じ、今までどおり補助金を出してもらうことに成功した。

こうしてようやく岐阜市の上水道は完成したのであった。

「何日間も、雨がほとんど降らないのに、上水道のおかげで、おいしい水がたくさん飲めてありがたい。」

「私たちの市では、各家庭への引き込み管まで市が負担してくれた。」

「上水道ができたので、風呂屋がたくさんできた。おかげで毎日、気持ちのよい風呂に入ることができるようになった。」

と、市民は喜んだ。

当時、岐阜市は、いろいろな伝染病により、幼児の死亡率が高かつた。何としても、蚊や蠅の発生を防がねばならない。そこで国松は、汚水がひとところにたまるないようにするために、地下に下水道を設置すると同時に、くみ取り式の便所を水洗式の便所にするを思い立った。

この工事は、上水道よりさらに多大な経費を必要とした。そのために、少ない費用で何とか完備しようとして、分流方式という新しい方法を生み出した。これは、家庭から出る汚水だけを、雨水とは別にして処理する方法である。この工事に要する経費は、従来の方法の半額であつた。しかし、この方法や水洗便所にしようとする国松の構想に対し、疑問に思う者や不安の気持ちをい多く市民も多数あつた。

「糞尿は、農家の大事な肥料だから、それがなくなったら、私たちは高い肥料を買わなければならなくなる。」

「本来なら二倍かかる工事を、こんなに安くやって大丈夫なのか。」

「いくら見積もつたといつても、金がかかり過ぎる。」



□上水道施設（岐阜市鏡岩水源）  
※現在は「水の体験学習館」として利用されている。

政府も、一地方都市で、全国に例のない百パーセントの普及を目指した下水道工事であることと、新しい分流方式に不安をもっていた。

国松は、「糞尿は、すでに名古屋市が、処理した衛生的な肥料を安く農民に分けている。下水道工事のために、他の事業を圧迫することは絶対にしない。」と、市民を説得して歩いた。また、政府の許可を得るために、市の幹部を東京に常駐させ、毎日電話で激励した。

こうした国松の粘り強い説得のおかげで、昭和九年に工事にかかることができた。最初のうちは、工事は順調に進んだ。しかし、昭和十二年に日中戦争が始まり、それが太平洋戦争へと経過していくにつれ、セメントや鉄筋などのいろいろな物資が不足した。各家庭からは、鍋や釜が、寺からは鐘までが供出させられていた。また、労働力が不足し、小学生までが工場で働いた時代である。この戦争の最中、日本中のどこで下水道工事をやっていたであろうか。セメントや鉄筋を、誰がこの工事のために都合してくれたであろう。工事材料の不足する中で、最後は代用セメントまで使い、第一期工事は、戦争たけなわの昭和十八年に完成したのである。

この完成で、岐阜市は伝染病がほとんど発生しなくなり、全国でも模範的な衛生都市となった。

出典 岐阜県教育委員会 郷土の資料 「郷土史研究にうちこむ」(平成十三年十一月)